

中国羊毛

中国における牧羊は古来広漠たる内外蒙古、青海の遊牧地帯及び西北辺疆各省の回教徒の分布地域に自然発達を見た。現在正確な飼養数は不明であるが恐らく三千数百万頭の多きに達するものといわれ、従来主に肉は食用、毛皮は防寒用被服に用いられ、羊毛即ち副産物としての纖維の利用は僅かに毛毡及ジュウタン類に限られ、其の多くは顧られなかつたが一八八〇年代に在華英商が着目、海外への輸出が促進された。其の後天津—張家口—包頭を経て次第に奥地に伸張していつたが、そのうち、英・独・中国資本の角逐が行はれ、他方外蒙よりロシア資本の進出があつて、さまざまの曲折は有りながらも、遂年、其の生産量を増し、一九三五年には四千万斤を突破する盛況を示すに至つた。

しかしこれ等の羊毛類は従来何等の改良も行われた事なく旧態依然として自然の推移、原始的放牧のままに放置されているため、寒氣、飢渴、疾病、狼害等に依る斃死が多く、頭数増加は勿論の事、品質の一般的欠点と云われる粗死毛の多い事、歩留が低く且つ不定である事、規格の不統一、及び出廻量の不定なる事等は、今後の改善が期待される。

羊毛の主産地は揚子江以北黄河の流域及蒙古地方であり西海、甘肅省等西北辺疆諸省を主とし蒙疆地方、華北一帯の諸地域にまたがつている。

主要羊毛産出地

青海省	中剛	西寧	貴德	湟源	大通
甘肅省	蘭州	甘州	涼州	肅州	平番
寧夏省	寧夏	中衛	登口		

陝西省 榆林 定辺 西安

新疆省 哈密 迪化

蒙疆 張家口 貝子廟 東西ソニット豊鎮 厚和 包頭

華北諸省は省略。

中国羊毛の品質は羊毛の一般的水準よりすれば概して粗悪なもので、粗布、毛布、フェルト、カーペットの製絨に使用されるものが多く、世界市場に於ては殊に絨氈羊毛として消化している。

そうして中国国内においても生産地の差、春、夏、秋の剪毛によるのか、剪毛方法はなにか等によつて其の品質に種々優劣を生じている。

生産地別に見ると最も良質で最も高価な品種は、青海省の西寧の羊毛であり紡織用として消化されている。

次は甘粛省の西路及甘、涼州、平番羊毛であるが、これは毛布原料であり、羊布原料として我が国へも輸入された事がある。

これに次ぐものは寧夏省の河西より陝西省の北部一帯に産する灘羊毛及河北省辛集附近の寒羊毛で中国羊毛中特異の風味を持ち紡織毛布用として価値がたかい。

しかし新疆及内外蒙古一帯の産毛は品質粗悪な下級品である。駱駝絨、山羊絨はそれぞれ中国の選別熟練工により、選別（ヘヤー）の抜取りをされるものでありこの山羊絨は中国にのみ産出する特産物である。

第二次大戦終結前の奥地集荷機構

かつての中国羊毛は辺疆地域と蒙疆地方とを除けば殆んど云うに足りないものであつた。羊毛主産地は長い間



蒙 古



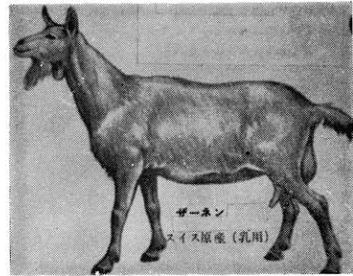
新 疆 の 放 牧



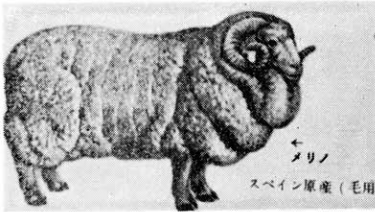
ラ ク ダ 隊



リンカーン (イギリス原産、毛肉兼用、長毛種)



ザーネン (スイス原産、乳用)



メリノ (スペイン原産、毛用)



カシミヤやぎ (インド・カシ米尔地方原産、上質毛用)



コリデール (ニュージーランド原産、毛肉兼用)

原始的な自然状態にあり、集散市場は包頭を除き完全に漢人商人に掌握されていた。そして其の経済活動は殆んど張家口、大同、厚和、包頭の四都市に集中していた。そしてこの羊毛取引を通じて実に極端なる不当な交換により漢人商人は羊毛生産者の富を大量的に収奪し莫大な利益を獲得していた。

買売家は大量の物資を廂を経て内蒙奥地に運び込む。それで廂と廂とを結ぶ路線が蒙古草原の経済路となるわけである。この買売家は、廂附近を根城にして大草原に転在する包^パを訪れ生必物資を卸して廻る。一巡して畜産の出廻時期に前卸した物資の代償として生畜或は皮毛を受取つて来る。この場合蒙古人は買うのが先で、其の埋合せに自分の畜産を売放すと云う事である。即ち蒙古人はたえず買売家から掛売の立場に有り、然かも無智にして計数に鈍い蒙古人は老獪な買売家のために先づ高価な必需品を買わされ、後畜産品を不当に安い値段で買叩かれていた。即ち買売家は二重の利を恣にしていたのである。之れは東部蒙古に於て甚だしく其の中心地は貝子、廂である。張家口の張北、多偏其の他満洲より行商する買売家は同地方だけでも一、五〇〇人と云はれ、車の上に綿糸（縫糸）綿布、蠟燭、磚茶、櫛、石鹼、炊米、砂糖（赤粗及角砂糖）煙草（卷煙草及水煙）焼酎、針、碗、箸、小刃、麵粉、燐寸、菓子、其他の必需品を満載して毎年五月初めから蒙地行商に出て予定の（コース）を一巡して十月頃に根拠地に引揚げる。普通持出した資本が二〜三倍になつて帰つてきたと云う事である。

戦前における回教民の役割

蒙疆に於ける回教民の職業分布を見ると第一に彼等の占める職業の多くが極めて地位の低い種類のものであり、しかも彼等の大多数が之に従っている事実、第二に皮毛業者が厚和、包頭の両市に集中している事実、第三に駱駝運送業者が全蒙に亙り彼等の掌握する所となつている事実を知る事が出来る。

厚和に於ける回民系富豪の家は一部は西北辺疆各地へ駱駝の隊商を派遣する駝行業者、他の一部は其の商取引の關係より問屋として旅泊業を兼營して居る毛機、更に數戸の者は毛機駝行の外、黄河を利用する舟運業に及んでいた。

包頭に於ける回民羊毛商は戸數に於ては漢人系問屋の五分ノ一に過ぎなかつたが実勢力は優に漢人に拮抗し得て余りあり、殊に回民系毛店は其の經驗に於て資本額の巨大と地盤の鞏固なる点に於て遙に漢人商人を凌駕し、包頭に集中する羊毛総量の約半数以上を取扱つていた上に、回民舟運業者及駝行業は黄河上流の筏流しが全く西北回民の独壇場となつており、寧夏方面より包頭に至る駱駝隊商の総てが回民により組織されて居、り西北一包頭間の水陸兩路の交通路は殆んど全く包頭回民運輸業者の掌中にあつた。

戦前の奥地回民の集荷活動

蒙疆地帯に於ては漢人商人の手によつて蒙古人より羊毛、毛皮を集荷していたのに対し辺疆諸省に於ては専ら回民の手により遊牧テイベット人より之等を集荷していた。この地域においては漢人は黄河の沃土帯に主として農耕を営み、知的（公吏、教員等）技芸的職業に従事はして居たが、常に危険と困難とを伴う商業活動の進出には、従来の移民である回民に遠く及ばなかつた。

之の遊放地で生産される皮毛、塩及鹿角精等は回民が組織する遠征隊の交易物資、各種穀類、綿布、釘、糸、紐の雜貨類、鍋釜等の什器類、小銃其他の武器、砂糖、乾葡萄、麥粉類及茶等と交換せられる外、他面にはテイベット人が之の貿易を通じ回民に接觸する事により、外界の消息乃至は一般に外界の文化を徐々に吸収してゐるのである。即ち回民の役割には羊毛其他奥地物資の集荷、搬出の貿易と同時に政治的文化的な使命が附随してゐ

たと云うべきである。

中国羊毛は世界的に見て極く少量であり粗悪羊毛として、殆ど顧みられなかつたが早くより米国には輸出されポストン附近各工場において使用せられ、ソ連がまた異状な進出を示した。即ちソ連は戦後には最近外蒙における畜産の増殖に成功し、牧草の改善により僅々十ヶ年にして外蒙一千万頭の家畜は二千万頭に増殖せられ、一挙に本国の欠乏せる食料及被服資源の解決を計つた。

山羊毛は

細毛

中毛

粗毛

と大別され、細毛は優良品として織物の原料になる。中毛以下のものが製筆用、刷毛用の原料となるものなれど、山羊の全身にわたる毛の發育状態は緬羊の如く一定した状態でなく、一頭毎に毛質に甚しき差異があるために、之れを選別して輸出されるものであるが、この選別は中国人以外には出来ぬであろうといわれておりしかもその選別の賃金は戦前においては極めて安く、その賃金の支払いも多くは選別された残りの屑毛を以て支払われ、この屑毛もまた中国に於ては大いに利用面があつたとの事である。

山羊毛は筆用及刷毛用向けとして輸出される場合、大略左の如く区分せられている。

広長峰

白細峰

長羊毛

光長峰	長羊鬚	長羊尾
上白羊尾	南短峰	提揀峰
黄突峰	粗爪峰	上爪峰
上上爪峰	花薰峰	花黒羊毛
細光峰	細直峰	副蓋光峰
老光峰	粗羊毛	光 峰
直 峰	花頭羊	黒短峰
外内峰	中短峰	白黄峰
土爪峰		

(花の字のついたものは胡麻毛である)

これら輸入羊毛(山羊毛)は名称の異なる如く

毛の長短
 毛筋の太細
 毛先の良悪
 弾力の強弱
 色彩の良否

頭骨の涙孔は

眼窩縁の内方に開く

眼窩縁に開く

山羊、羊、共に角の有無その他不定である（家畜では）が右の何れかの点で、はつきりと区別する事が出来る。即ちヒツジには顎髯がないのであるが、羊の尾や、羊の髯が、輸入されているところに矛盾があるのである。

前記調査報告にも山羊毛と記されており、古賀上野動物園々長始め動物学者の説によれば、中国には緬羊、山羊以外のヒツジはいない。蒙古には蒙古羊と寒羊とが居り（寒羊は駱駝が背中の瘤に脂肪を貯える如く尾に脂肪を貯えるので尾が非常に太くなる）これは共に家畜であり、中国の各地でも飼われているが顎髯がない。

アフリカ、アトラス山脈、スダン等に住むというバーバリシツプ（上野動物園にいる）はアフリカ唯一の野生の羊であるというがこれにも顎髯がない。

また黄羊（ホワンヤン）は北滿、蒙古などにおるが、野生種であり、このほか野生のヒツジ約十種類程あるが顎髯がないという。

羊には顎髯がないわけであるのに羊の尾や羊の髯が輸入されているというのは、ヒツジ類に対する総称によるもので

羊

緬羊

山羊

を総括してヒツジと呼んでいるため、緬羊の毛も羊毛と呼ぶので山羊毛を羊毛と呼んでも誤りではない。また毛も緬羊と同様、織物に用いられている。しかし、厳密に言えば山羊毛、山羊髯と呼ぶべきであろう。

緬羊の種類は

メリノ (原産スペイン) 毛用

コリデール (原産ニュージールランド) 毛、肉兼用種

サウスダウン (原産イギリス) 肉用

シロツプシャー (原産イギリス) 肉用種

リンカーン (原産イギリス) 毛肉兼用種

オストフリーシャン (ドイツ) 乳、毛、肉用種

カラクール (中央アジア) 毛皮用

其の外ブラックフェース。ロムニーマーシュ。ボーダーレスター。

チエビオット等がある。

ヒツジの種類は (家畜)

蒙古羊 (原産 蒙古) 肉、毛用

寒羊 (原産 蒙古) 毛皮、肉兼用

である。

山羊の種類は

(日本の畜産) によれば、われわれの飼っている山羊と、一ばん関係の深い野生の山羊は二つあつて、その一

つはベリアル山羊といい、イラン、小アジア、アフガニスタンの岩山に五〇頭位の群をなしてすんでいる。弓状の大きな角をもつた山羊。今一つは、マルコール山羊といつて、ヒマラヤ山西部の渓谷にすんでいるもので、雄はらせん状の飴棒のように、ねじれた角をもっている。この山羊が、アンゴラやカシミヤの祖先といわれている。

山羊の左右の目は各々べつものを見ているので便利のようであるが距離をはかる事は出来ない。

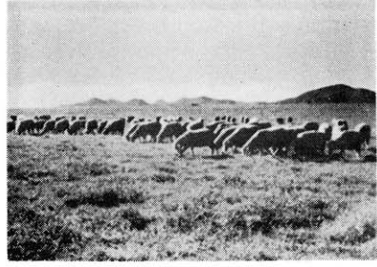
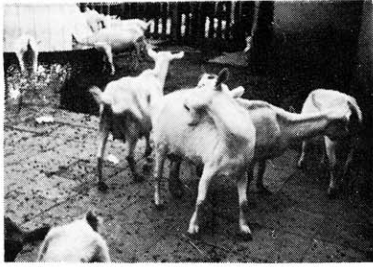
日本には推古天皇の時代に百済から貢物として山羊が献上されており、その後、唐（中国）から献上されたりしたが、江戸時代のはじめに中国から、長崎と鹿児島に肉用の山羊が多数輸入されており、またペルリが嘉永年間に小笠原島に乳用山羊を始めて放し飼いでいる。

そして明治の末には、スイスから乳用山羊のよいものが輸入され、一般の関心が高くなり、政府もしばしばザーネン種を輸入して現在では約五〇万頭の乳用山羊が飼われている。

かように羊はわが国でも古くから飼われていたが、最も飼育の盛んになつたのは、戦争で毛糸の輸入がとまつてからで、終戦後昭和三十年前後には、全国で百万頭を越え、このうち二割余が北海道であつたが、最近化学繊維が発達して来たため、羊毛の需要が減りはじめ、ヒツジの数も下り坂になり三十五年二月の統計では、全国で七十八万八千頭、北海道だけで十八万七百七十頭となつていているという。

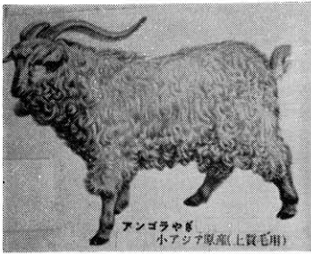
しかし、この下り坂も底をついたらしく、羊毛の需要は相変らず下り坂だが、かわつて羊肉の需要がふえてきて、ハムやソーセージにするほか、最近流行して来た、ジギスカン鍋に相当利用される。

ジギスカン鍋は今では家庭にもはいり、専門店もふえ、特にタレもその材料の配分に秘術をつくすものとい



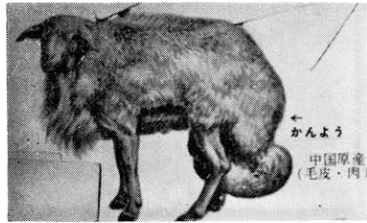
羊肉を焼く
古い鉄板に百年の歴史を誇る焼羊肉屋

上段右 北海道月寒牧場
上段左 山羊
二段 百年の歴史を誇る
焼羊肉屋



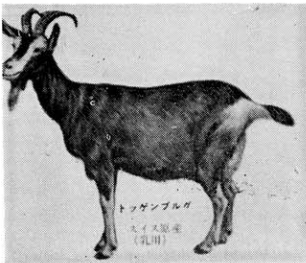
アンゴラヤギ
小アジア原産(上質毛用)

アンゴラやぎ(小アジア)
の原産・上質毛用)



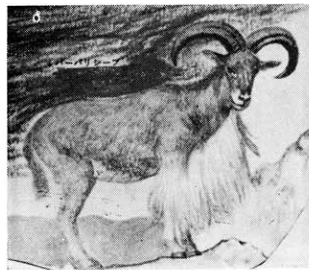
かんよう
中国原産
(毛皮・肉)

かんよう(中国原産・毛皮・肉)



トッゲンブルグ
スイス原産
(乳用)

トッゲンブルグ
(スイス原産、乳用)



バーバリシープ

われ、北海道に遊ぶ人は、まだ味を知らぬ人でも月寒などで、試食して帰る人が多い。

欧来では羊肉の方が牛や豚よりも高級とされているというが、北海道旅行で始めて羊肉の味を知り、それ以来ジンギスカン鍋党になり、伊豆、神奈川、東京などの御狩場焼以上であるとして、モウモウたる煙の中にすわりこむ人も少なくないとの事である。

羊肉の需要が高まりつつあるのでサウスダウンという肉用の品種も輸入され、種羊場では、毛と肉の両方に有用なヒツジの生産を試みているとか。

山羊の種類は家畜のうちでも最も多く、世界各地にいろいろなものがあるが、一番改良がすすんでいるのは乳用種で、乳用種以外に毛用の山羊もいるし、中国では肉用の山羊が飼われている。

ザーネン

スイスの西部地方にあるザーネンでできた、世界で最も有名な乳用山羊の一つで、日本の山羊は、現在このザーネンまたはその系統のものがほとんど大部分である。

やせ型でくびが長く乳房が大きく発達していて、白色の毛でおおわれ、のどに左右二個の「肉ぜん」をぶらさげている。

トッケンブルグ

この山羊はスイスの東部地方のトッケンブルグ平原にできたもので、日本にはアメリカからララ物資として寄贈されたものと、その子山羊が各地に飼われている。

ヌビアン

アフリカのヌビア、エジプトに飼われている山羊であるが、この山羊も先年アメリカから日本に多数寄贈されたので国内各地で飼われている。

カシミヤ

ヒマラヤ山のふもとの、カシミヤ地方、チベット、中国に飼われているが原産はチベットである。

アンゴラ

小アジアにできたものであるが、その毛が小アジアアンゴラ市場で売買されたのでその地名をとつたのである。

これらの毛は若い山羊の毛ほど美しく、六才位になると毛があらくなつて織物には使えないとある。

羊の産地は世界各地に渉り、これら産地より羊毛が輸入されているのであるが、刷毛、筆用の羊毛輸入が支那に限られているのは、その昔、秦の始皇帝の臣蒙恬將軍が毛をもちいて筆を造る事を發案、以来支那においては文字を書く唯一の器として伝えられ、それがわが国にも及び、筆用の羊毛は古くから支那より輸入されていたのであり、ついで刷毛用にも供せられているのである。筆について白樂天の詩に

千 万 毛 中 選 一 毫 (千万の毛の中から一本を選ぶ)

とあつて筆に用いる毛の厳選のさまが知られるが、文字書きに毛筆の必要のない他の国の羊の産地では、これに関心がなかつたであろうことも当然であろう。

このように山羊の毛も多くは織物に使われるので年を経て毛筋の太くなつたもの、或は、毛筋が太くて織物に使えぬものが、刷毛、筆用に向けられるものであり、その毛質も多種多様にわたり、優秀なものが多く、筆、

刷毛の羊毛製といわれるものは殆ど大部分、この輸入毛が使われる。国内産毛との比は一目瞭然であるが、これは山羊は緬羊と異り一頭毎に極端にその毛質を異にし、その一頭分中にも首、背、胴、尻等と毛質に差異があり、屠殺或は毛を取る季節によつても毛質に差があるので狭隘な国内産山羊の毛でも、中には、輸入羊毛に匹敵する様な毛をみる事もある。ましてや輸入毛は支那大陸より蒙古に及ぶ広汎且つ風土の異なる各地域より産するのであり、しかも放牧によるものが多いので、其の質が多種多様にわたるのであろう事は、支那産豚毛が、重慶、漢口、天津、満洲と産地によつて、その毛質に大差（業者がみれば）がある事によつても容易に察し得られるところである。

もつとも一頭毎に毛の生える状態の異なる事は、あらゆる動物に共通であり、その点人間もまた例外ではない

古川柳に

振袖に似合はぬ所はももんじい

（ももんじいは毛深いの意）

古い狂歌に

五月雨にかびてなりともところ禿がひたひに毛が生えよかし

とあり、人間も文明の程度が如何に進み、科学万能の時代になつても、その生毛状態の不公平は、昔から如何ともしがたいところである。

そのためにこそ毛生え薬や、脱毛剤が売られているのであり、さらにはヘアピースや男女の鬘迄、市販されている。

(羊頭を懸げて狗肉を売る)とは店頭によい品をみせておいて悪い品を売るの意で、看板にいつわりありのインチキの代名詞で、缶詰に牛肉を表示して中身は鯨肉や馬肉であつたので、さわがれた事もある。中国後漢の光武帝の時(十一代垂仁天皇時代)約千九百年前に出来た言葉である。